
The world which is in a state of flux(仮題)

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world which is in a state
of flux (仮題)

【Nコード】

N5513Z

【作者名】

樋口

【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコル アル
ゴリズムによる精神の成長を可能とする人工知能の実現すら叶う時
代。

二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌
の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。

送り主の分からない怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛
れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決め

る。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片だった。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している』』で検索を試みる。

若干長めの接続時間のあと、表示されたのは膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“『』公式情報サービス”というページを覗き、概要説明文にあった『新しい世界』というフレーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

ただひとつ、自身の性別を男性と偽って。

第一章“幸せの絵画”一話（前書き）

はじめまして、作者の樋口と申します。

この作品は一見SF風味のようですが、出来ればファンタジーとして読んでいただけたらと思っています。

さて、プロットや構想、詳細な設定を書き留めるために、この作品機能を使っているのですが、編集に不慣れで構想の一部が公開設定になってしまっています。

検索にはかからない設定にしていますが、度々こんなことが起こるかもしれませんので、出来るだけご覧にならないようご留意ください。

第一章 “幸せの絵画” 一話

「ねえ、いるんでしょう？」

玄関の向こうから聞き慣れた声が届く。

その声を努めて聞き流しながら、詩歌しうたはすぐ傍にある居間の床で毛布にくるまり、胎児のように丸くなっていた。

「ちよつと！ ここ開けなさいよ！」

やけに通る怒声と共に扉を叩く音が何度も続き、室外の喧騒に詩歌は思わず「うるさい」と口にしてしまふ。

少し前は会うものの生返事しかせず、最近になって会おうとすらしなくなったからか、彼女の反応は顕著だった。

一際大きく詩歌の名を呼ぶと、太鼓を思わせる速さでひっきりなしに戸を叩き始める。

しかし、それも長くは続かなかった。

詩歌の貫徹した無視に、もう反応を返すつもりがないと悟ったのか、やがて場は静まり返る。

怖いくらいの静寂が満ちる中で、詩歌は後ろめたい思いで嵐が過ぎ去るのを待っていた。

怖かった。

彼女が善意から来てくれていると知っていても、気心の知れた友人である彼女が相手だとしても、詩歌は誰かと向き合つのを恐れていた。

「なんで出てこようとしないのよ……」

嘆くような、悲しむような呟きを聞いた時、玄関の向こうで苦虫を噛み潰したようにしている彼女が目に見えかぶようだった。

そんな言葉だけを残して、彼女は去っていく。石畳に立つ硬質な足音が早く遠ざかるように祈りながら、詩歌は消え入るように一言「ごめんね……」と漏らした。

足音が聞こえなくなり、くるまっていた毛布から這い出すと、詩歌は玄関扉に付いた郵便受けから外の様子を窺う。

本当に誰もいなくなつたか念を入れるためだ。

自分でも笑えるくらい神経質な行動に、嘲笑いが零れる。

いなくなつたと思わせて油断を誘う。

彼女がそんな真似をするはずがないのに。

本当に自分一人であると確信を得た詩歌は、自らが住むマンションの一室を見渡す。

殺風景な部屋だ。

高層建築の粋を凝らして建てられたこのマンションは広く、十人でも易々と暮らしていけそうなのに家具が必要最低限あるだけ。

古臭いブラウン管のテレビに、寝具とクローゼット、申し訳程度にソファがあるくらい。

詩歌はこのマンションが好きではなかった。

生きていくのに不必要なくらい広い部屋も、庶人を寄せつけない格調高い外観も、息が詰まってしまうそうになることはあれど、喜んだことはない。

玄関の隅で蹲っていれば彼女に騒がしくされる。

そう分かっているとしても狭い玄関から動かないのは、広い部屋でひとりいる時間がどうしようもなく嫌いだからだ。

倦怠感を打ち払うように頭を左右に振り、リビングに向かって重い足取りで歩いていく。

このマンションは、著名な画家として恥ずかしくない家に住むべきだと、父親に厳しく言いつけられ、母親にやんわりと強制された結果だった。

インテリアに口出しされないのは誰かを招く必要なんてなく、このマンションに住んでいるという体裁さえ保てれば十分だと判断されたからだろう。

益体もないことを考えているうちに、リビングに辿り着いた。

これまた高級そうなドアを開けて入り、部屋の隅に置かれた画布を目指し歩いていく。

脚立で立てられた油絵用の画布には、布が被せてあった。

乱暴に布を取り払う。

投げ捨てられた布が床に落ちる音を聞きながら、詩歌は晒されたキャンバスを眺める。

そこには、完成した『作品』が描かれていた。

小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

自分の思い描くものを目に見える形で現実のものにできる絵の世界に没頭した。

家族が笑い合う光景も、怯えるように自分から距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も、切望し手に入れられなかつ幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。

それは仮初めと呼ぶのも烏滸がましい虚構の幸せだったけれど、

当時、孤独に潰されそうだった自分を絶望の淵から救ってくれたのも確かだった。

だけど、今は……。 詩歌は目の前にある『作品』を感情のない、淀んだ瞳で見つめた。

テーマは『悲劇』。

長い時間をかけて二人の間に横たわるしがらみを乗り越え、分り合えた兄弟に襲いかかる不幸。

兄は迫り来る異国の大軍の前に立ちほだかり、軍人として、兄として、また一人の人間として、愛する祖国と弟、そして幼い頃のように純粋な気持ちで笑い合える未来を守ろうとする。

死地に次ぐ死地を潜り抜け、遂には祖国を勝利に導き凱旋する兄であったが、兄の心変わりを知った王は自身の後ろ暗い所業が白日の下に晒されるのを恐れ、忠誠を誓い墓まで秘密を持っていくと心に決めていた兄を弓矢で射抜く。

凱旋中に矢を胸に受け、慌てて駆け寄ってくる弟とざわめく民衆の前で悲哀に叫び、睫毛を濡らす兄の姿を写實的に描いたのがこの絵だ。

そう、悲劇だった。

詩歌は複雑な思いでその絵を眺め続ける。

自分に『悲劇』や『惨劇』を描き出す才があると知ったのは、いつの頃だったろう。

作られた『幸福』を一枚、また一枚と描き、大きくなるにつれて、絵が嫌いになっていった。

幾ら『幸福』を描き出しても現実には何ら影響を与えず、素っ気なくあしらわれ、優しいようで空っぽの言葉をかけられ、くぐもった悲鳴を上げて後ずさられる。

虚実に過ぎないのだと思い知らされる。

今では絵を好きなのと同じくらい、絵が嫌いだった。

「わたしは何をしてるんだろう……」

シミ一つない真っ白な天井を見上げ独白して、しかしすぐに仕事だと気づく。

明日には、次に描かなければならない『悲劇』を描くための画材が届くはずだ。

益のない感傷に浸っている暇はない。

そう自分に言い聞かせて、詩歌は明日に備えて準備を進めていく。

作業中、先程口にした独り言が頭から離れることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

The world which is in a state of flux(仮題)

2011年12月19日00時55分発行